



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ギョーザ事件とグローバリズム
Author(s)	濱田, 康行
Description	巻頭言
Citation	農林経済, 9933, 1-1
Issue Date	2008-03-13
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33056
Type	article
File Information	hamada.pdf



ギョーザ事件とグローバリズム

冷凍餃子に殺虫剤が混入。この事件で日本中が揺れた。輸入した商社、販売元、売ったスーパーなどがそれぞれに会見し、カメラの前で頭を下げた人もいたようだ。しかし、ひとつ釈然としないのである。

この事件が、悪意のある個人（複数でも同じ）の犯罪であるとしたら、これは防げない。少なくとも発生を防ぐのは難しい。刑罰を重くして犯罪をおこさせないようにすることは可能だが、万能ではない。いわゆる確信犯にはこの手は通じない。劇場犯や愉快犯にもなかなか通じない。

犯罪だとしても、それが被害という結果を生じさせないように出来た、という主張もある。例えば輸入元が全品検査を徹底する。しかし、それは事実上不可能である。数量が多すぎるし、コストがかかり、製品価格に転嫁せざるを得ない。また、何が入っているかを検査するのは時間がかかる。不特定の薬品を検出するのは難しい。これは化学を知っている人なら常識だ。

工場でなんらかの目的で使用されている薬品が混入したというなら製造者の責任は明白だ。これは防ぎ得る。ちゃんと管理すれば二度目は防げる。

そういえば、一連の食品偽装事件があった。製造年月日をごまかしたり、使っていない原料を表示したり。しかし、これらは利益に目がくらんだ行為にすぎない。すぎないを減じるような言い方をしたのは、まさか誰かを殺してしまおうとは思っていなかったからだ。

ところがマスコミの報道をみると、性格の違うこれらの事件がごっちゃにされている。北海道の食肉偽装事件以来、国民の関心が高く、関係報道の視聴率がやたらと高いことも背景にある。しかし、殺人を意図したかもしれない今回の事件とは区別した方がよい。

“中国から輸入するのがいけない”という国産至上主義の主張も聞かれる。しかし、ちょっと待て。冷凍食品は原材料こそ農産物だが、それは工場で作られる工業製品だ。製造業はいまやグローバリズムの下にある。つまり、世界中から安価な材料を調達し、安価な労働力で最も効率的な場所で作る。そうしてこそ生き残れる熾烈な世界である。もちろん、地産地消は望ましいが、全部そうすることは出来そうもない。私達は遠い昔にグローバリズムへの“ルビコン”を渡っている。元には戻れない。

犯罪を防ぐには、人々の道德心の向上しかないし、そのための教育しか方法はない。今回の事件はたまたま中国で起きたようだが、犯罪は犯罪者がいればどこでも発生しうる。人々を殺めてはならない。そういう道德がなければこの種の事件は防げない。

経済だけがグローバル化し、私達の精神はローカルなまま〇〇人という国籍の中に閉じこもっている。誰かが作ったものを誰かが食べる。その誰かは皆、地球上の人類であり兄弟なのだ。この当たり前が先にはない事が問題なのではあるまいか。